もふもふが溢れる異世界で幸せ加護持ち生活！6

A L P H A L I G H T

ありぽん
ARIPON

アルファライト文庫

CHARACTERS

登場人物紹介

シャドウウルフ
森で恐れられている怖い魔獣。
ジョーディと一緒に森の異変を調査することになった。

ドラック&ドラッホ
Aランク魔獣であるダークウルフとホワイトキャットの子供。
ジョーディに懐いている。

クルド
ジョーディのもとにやってきたキノコの妖精。
キノコの子供達の中では一番のお兄ちゃん。

ジョーディ
日本から異世界の侯爵家に転生した、女神の加護を持つ少年。
前世の分まで元気いっぱい。

ラディス

ルリエット

マイケル

ニッカ

グッシー

ポッケ

プロローグ

僕の名前はジョーディ。ジョーディ・マカリスター。女神のセレナさんの力で、日本から異世界の侯爵家に転生した一歳の子供です。

この前、セルタールおじさんっていう、お父さんのお友達の街でお祭りが開かれました。

僕はそこに、僕の家族と、ダークウルフのドラック、ホワイトキャットのドラッホみたいな魔獣達、それに最近僕のお世話係になったニッカと一緒に行ってきたよ。

そこでは、美味しい物をいっぱい食べて、出店でいっぱい遊んだんだ。

それと、魚釣り大会にも参加したよ。

大会ではなんと、僕がジュエリーフィッシュっていうキラキラのお魚の魔獣さんを釣り上げて、優勝しちゃいました！

ジュエリーフィッシュは、僕達よりずっと年上のお姉ちゃんだったけど、僕達と一緒に遊びたいって言うから、僕はチェルシーって名前を付けて、一緒に僕達の住むフローティーの街まで帰ってきたんだ。

新しいお友達もできたお祭りは、とっても楽しかったです！　また行きたいなぁ。

1章　キノコとキノコさんとキノコの街

お祭りからお家に帰ってきて少しして、暑い日がだんだん少なくなり、朝と夜は涼しくなってきました。お昼はまだ暑いけど、暑すぎて僕達がぐったりする日はなくなったよ。

でも、まだまだ水遊びはできるから、今日はみんなでチェルシーお姉ちゃんがいるお池で遊んでいます。マイケルお兄ちゃんも一緒だよ。

「ばちゃばちゃ」

「そうね、ばちゃばちゃね」

僕が水をばちゃばちゃさせたら、ママがニコニコしながらそう言います。

『あっ、そっちに小さいお魚行ったよ！』

『ミルク、お池に泥を入れたらチェルシーお姉ちゃんに怒られるよ！』

ドラックとドラッホが楽しそうに喋ってます。ミルクは、サウキーっていう魔獣です。

チェルシーお姉ちゃんはお家に来るまでは小さな水槽に入っていたけど、お家に来てからは、庭にあるお池で暮らしてるんだ。

お家には何個かお池があるから、全部のお池をお姉ちゃんに確認してもらって、お家で

一番大きなお池で暮らすことになりました。

そこは綺麗な石がいっぱいで、周りには綺麗なお花がいっぱい咲いているお池です。

僕はお姉ちゃんが住むお池を決めた時のことを思い出します。

お姉ちゃんがお外に出るための入れ物の中からそのお池を見ていたら、お魚さんがどんどん集まってきて、それからお水から顔を出して、口をパクパクさせていたんだ。

僕が何をしてるんだろうと思っていると、グリフォンのグッシーがお姉ちゃんとお魚さんはお話ししているって教えてくれたよ。

それでお話が終わったお姉ちゃんは、お魚さん達と一緒にこのお池で暮らすって言いました。

ママがお姉ちゃんに本当にこのお池でいいのか確認してたっけ。

でもお姉ちゃんは『みんな私のことを歓迎してくれているし、この池は住み心地が最高だって教えてくれたから。ここにするわ』って言ってそのままそこに住み始めたよ。

それからお姉ちゃんとはお池で遊んだり、時々さっきの入れ物に入って、お家の中で遊んだりすることになったんだ。

僕はそんなことを思い出しながら、池の中のお魚さんを見つめます。

「さぁ、ジョーディ、みんなも。そろそろおしまいにしましょうね」

ママにそう言われて、みんながお池の中から出ます。

その時向こうの方から、僕達を呼ぶパパの声がしました。
「ルリエット、マイケル、ジョーディ！」
「あら、あなた。仕事はどうしたの？」
「一段落したんでな。そろそろ時間かと思って迎えに来たんだ」
「そう。じゃあ、あなたはジョーディをお願いね」
パパが僕の足を拭いてくれて、お池に入るから脱いでいたズボンをはかせてくれました。
準備が終わったら、お姉ちゃんにバイバイしてお家に向かいます。パパと手を繋ぎながら、みんなでゆっくり歩いて行ったよ。
「だんだんと、葉が色づいてきたな。お店じゃ、季節の物がだんだんと並び始めたぞ。木の実もこの季節の物に変わったようだ」
「この季節は美味しい食べ物が多いから、困っちゃうわ。太らないように気をつけないと」
「いやいや、どんな君でも綺麗だよ」
「ふふ。ありがとう」
ママもパパもニコニコしてます。……ふ～ん。
そういえばこの世界に、春とか夏とかあるのかな？　今は地球で言う秋っぽいけど、秋とは言われてないよね。何か別の言い方があるのかな？　そんなことを考えながら僕は家

に入ります。
入る時玄関の端の方を見たら、小さなキノコが生えていました。

その日の夜はママに、キノコの国の小さな子供キノコさん達が、森を冒険する絵本を読んでもらったよ。
「こうしてキノコの国の、小さいキノコ君達は、長い長い冒険から帰ってくると、次の冒険のお話をするのでした。おしまい」
「にょこ！」
僕は一緒に聞いていたドラック達に、「キノコ君のお話、面白かったね！」って話しかけます。
『キノコ君達って、本当にいるのかな？』
『ボク達は森で見たことなかったよね』
元々森に住んでいたドラックとドラッホはそう言って顔を見合わせていました。
「さぁ、みんなお話は終わりよ。もう寝ましょうね」
ママがそう言うと、みんなが返事をして、僕のベッドから出て行きます。
ママがみんなに毛布をかけてくれて、それからおやすみなさいをしてお部屋から出て行きました。

でも、僕がみんなに起きてる？　って聞いたらいくつも返事があったよ。
みんな、まだ眠くないって。だからもう少しお話ししてから寝ることにしたんだ。
ドラック達は、絵本みたいな動けるキノコさんを見たことはないみたい。でも、歩くお花さんは見たことあるらしいです。
それについて僕が聞いたら、お花の蜜をくれたり、ドラック達が暮らしていた洞窟の中をいい匂いにしてくれたり、一緒に遊んだり……とっても優しいお花さん達だったって、ドラックが教えてくれたよ。
だけど、ドラックパパによると、お花さんは仲良しの魔獣さん達の前にはよく出てくるけど、人が近づくとすぐに逃げちゃうみたいです。
そっかぁ。本当は会いたかったけど、無理やり会うのはダメだよね。いつか会えるかな？
あっ、そうだ！　グリフォンのグッシー達なら、動くキノコさんのことを知っているかも。
グッシー達は、僕達と魔獣園で出会ったけど、その前は森にいて、僕達が生まれるずっとずっと前から生きているでしょう？　もしかしたら会ったことがあるかもしれないよね！
僕がそう言ったら、みんながそうかもって言って、明日朝のご飯を食べたらすぐに、

グッシー達の所に行くことになりました。
そんな話をしているうちに、だんだんとみんなが寝始めて、静かになりました。
お話をする相手がいなくなっちゃった僕は、仕方なく冒険のことを考えます。
冒険できるようになったら、最初にどこに行こうかな？　森もいいけど、海とか岩場とか、洞窟も楽しそう。
考えていたら、僕はどんどん冒険がしたくなってきました。むくって起き上がって、ベッドの上に立つと、絵本に描いてあった絵の真似をします。
それは、キノコさん達が木の剣を持って、それを頭の上に上げて、冒険が成功してやったぁ！　のポーズしている絵です。
僕は剣の代わりにサウキーのぬいぐるみを両手で持って、万歳をしてみました。
『何をしているんだ、早く寝ないと、朝起きられなくなるぞ』
『そうだぞ。明日は朝からグッシー達の所に行くと言っていただろう』
ドラックパパ達が起きていて、目を細めて僕の方をじっと見ています。
「にょお、こにょ、いいにょ、よね!!」
『なんと言っているか分からんな』
『まぁ、なんでもいい。早く寝ろ』
僕は「ねぇ、このポーズ、カッコいいでしょ!!」って言おうとしたんだけど、ドラック

達が寝ちゃってて、伝わりませんでした。
ドラッホパパが後ろ脚で立ち上がり、僕に寝ろって言って、前脚で僕をちょんって押します。
僕はその手に押されて尻もちをつきました。もう、せっかくカッコいいポーズをしていたのに！
僕はもう一回布団に入ります。でも、なかなか寝られませんでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊

森の中で、小さな影達が会話をしていた……
『はぁ、心配ではあるが、お前達に頼むしかあるまい。大人達は今、アレの対処で動けんからな』
『そうじゃのう。若い者に頼むほかなかろう』
『よし、お前達に私達の世界から出ることを許そう』
『旅は大変危険じゃ。忘れ物がないようにの』
影の中でも威厳のありそうな者達がため息交じりにそう言う。
『『『は～い!!』』』

すると、若くて元気な声が重なって響いた。
『それとクルド。お前がこの中で一番年上で、魔法も使える。皆をしっかり守るのだぞ』
『はい!!　絶対にみんなを守ります!!』
『よし、では準備にかかれ。街の皆には今からワシが伝える』
『分かりました。では私は手紙を書きます。ペガサスはきっと手を貸してくれるでしょう』

＊＊＊＊＊＊＊＊

昨日、僕は結局早く寝られなくて、起きたのはお昼近くでした。
ドラック達は一回いつも通りの時間に起きたんだけど、寝ている僕を見ていたら眠くなったらしくて、また寝ちゃって、僕と一緒に起きたんだ。
お腹が空いていたけど、ママにはもうすぐお昼ご飯だから待っていなさいって言われました。
だからグッシー達とお話ししようと思って、お庭にあるグッシーが住んでいる小屋に向かったよ。
グッシー達は小屋から出ていて、干し草の上でまったりしていました。
「ちー、ちゃの！」

僕が「グッシー、おはよう！」って挨拶したら、グッシーは立ち上がってこっちに目を向けました。

『おはようジョーディ、ずいぶん遅く起きたんだな』

「ちょねぇ、にょこしゃ、ねんね、しょいにょ」

『なんだ？』

『えっとね、キノコさんと冒険のこと考えていたら、寝るのが遅くなったんだって』

ドラックが僕の言葉を伝えると、グッシーは首をひねりました。

『キノコさん？』

その後、ドラックパパ達が昨日のキノコさんの絵本のお話をしてくれて、そしてグッシーは話を聞き終わると、ニッと笑顔になって話してくれたんだ。

なんと、キノコさん達が暮らしている街は本当にあるんだって。

昔グッシーがいた森に、そのキノコさんの街があったんだ。

でもキノコさんの街は僕達には見えないし、見つけることができないみたい。街に特別な結界が張ってあって、人や魔獣には見えないようにしてあるの。

だから僕達が普通に森を歩いているだけだと、見つけられないんだ。

それにキノコさん達は、街からなかなか出てこないから、会うこともできません。

グッシーがキノコさん達に会えたのは、偶然だったんだ。街から間違って外に出てき

ちゃって迷子になったキノコの子供を、グッシーが見つけたんだって。

それで、グッシーはキノコの子供と一緒に、キノコの街を探してあげたよ。

でもグッシーには街が見えないから、探すのは大変だったみたい。

探し始めて何日かして、ようやく街が見つかりました。

でもグッシーには、それはただの草むらに見えたんだって。

キノコの子が突然目の前で消えて、グッシーはビックリ。

その後、突然ゾロゾロとキノコさん達が現れてまた驚いちゃったらしいです。突然に見えたのは、結界を出たり入ったりしていたから。

キノコさん達は迷子の子供を見つけたお礼に、グッシーにたくさんキノコをプレゼントしてくれたんだ。

それから、他のキノコさんの街は見えないけど、助けてあげたキノコの子が住んでいる街だけは見えるようになる、特別な魔法をかけてくれたらしいです。

魔法をかけてもらうと、グッシーの前に突然とっても大きな結界が現れて、中に入るとそこには、素敵なキノコさんの街がありました。

それからグッシーは、魔獣園で暮らすようになるまで、時々遊びに行っていたみたい。

『久しぶりに行ってみたいが……ジョーディ達が見ることができるかどうか……あそこに入れるのは、キノコ達が認めた者のみだからな』

そっかぁ。本当はキノコさん達に会ってみたかったし、キノコさんの街も見てみたかったけど、キノコさんが会ってもいいって思ってくれないとね。無理やりはダメ。

その時、メイドのベルがお昼ご飯ができたって呼びに来たから、グッシーにはまた後でお話聞くことになったよ。

僕達は急いでご飯を食べて、グッシーがいる小屋に戻りました。

その時、ママもキノコさんの街に興味があるって言って付いてきたんだ。

「あら、本当にキノコの街があるのね」

「ちー、たのぉ？」

『キノコの街はどんな所だった？』

『キノコさんのお家は大きかった？　お家は何で出来てるの？』

『キノコさん、とっても小さかったんでしょう？　大人のキノコさんも小さかった？』

『キノコさん達は何して遊んでるなのぉ？』

『どうやって歩いてるんだな？』

『まてまて。一度にたくさん質問するな』

ママ、僕、ドラック、ドラッホ、土人形のポッケ、ミラリーバードっていう鳥の魔獣のホミュちゃん、ミルクがいっぱい質問すると、グッシーが翼を振って止めます。

だってキノコさんに会って、キノコさんの街を見たのはグッシーだけなんだよ。いっぱい質問しちゃうよ。

グッシーによると、キノコさんの街には、キノコの形をしたお家がいっぱいあったらしいです。キノコの傘の部分が屋根で、柄のところがお家の壁になっているんだって。

それからキノコさん達は、大人も子供もみんなとっても小さいらしいです。

種類はいっぱいで、赤いキノコさん、青いキノコさん、しましま模様のキノコさん、ブチ模様のキノコさん、いろいろいるみたい。

あと、キノコの子達は、僕達と同じような遊びをしてるんだって。おままごとしたり、冒険者さんごっこしたり、追いかけっこしたり。みんな柄で歩いているんじゃなくて、ちゃんと手と足があるから、普通に歩いたり、走ったりできます。

キノコさん達のご飯も僕達と同じでした。お野菜やお魚さんやお肉、木の実や果物、なんでも食べます。一緒にご飯を食べたグッシーはとっても美味しかったって言ってました。

僕達はその後もいっぱい質問しました。でも途中でグッシーがもういいだろうって、お話をやめちゃったんだ。もう、もっと質問したかったのに。

それでグッシーにはお話の代わりに、僕達を乗せてお空を飛んでもらうことにしました。夕方まで、何回も乗せてもらったよ。

そして最後、街の上を一周して、お庭に降りようとした時、家の門から荷馬車が入ったのが見えました。

『ジョーディ、何かなぁ？』
『箱がいっぱいだね』
『見に行くんだな』
ドラックとドラッホ、それにミルクがそう言ったから、僕は頷きながらグッシーの首をパシパシ叩いて、荷馬車の方を指差します。
僕達が玄関に向かっていた馬車の方へ行くと、玄関にはパパと使用人のレスターがいたよ。
僕達がグッシーから降りて少しして、馬車が到着して、乗っていた人が降りてきました。
「お久しぶりです」
「元気だったか？　子供は？」
レスターとパパがそう話しかけると、馬車に乗っていた人が答えます。
「みんな元気ですよ。ただ、まだ連れて歩くには早いですがね」
お話が途切れたところで、馬車に乗っていたお兄さんが僕達の方を見てきました。
「はじめまして、ジョーディ様。私はオルドリーです」
「ジョーディ、ご挨拶だ」
パパにそう言われた僕は元気な声で挨拶します。
「ちゃっ!!」

「ははは、ジョーディ様、こんにちは」
挨拶が終わるとオルドリーさんは荷馬車の方に行って、荷馬車から箱を下ろし始めました。それを使用人さんが手伝います。
それを見ていたパパが、いい物だぞって教えてくれました。だから何が入っているのか、ドキドキしながら待ちます。
少しして、全部の箱が下ろし終わったのか、レスターとオルドリーさんが近づいてきました。
「今年は以上になります。確認をお願いします」
僕達は箱に近づきます。
箱は、僕の体と同じくらいの大きな木の箱でした。レスターが箱の蓋をギギギって開けます。
レスターが開けた箱の隙間から中を見て、「あっ！」って言いました。
なになに!?　レスター早く開けて!!　ギギギッ、バキッ!!　やっと蓋が開くと、急いでみんなで箱の中を覗きます。
「にょこ!!」
『わぁ、いっぱい!!』
『とってもいい匂い！』

僕とドラック、ドラッホが一緒に叫びます。
箱の中にはキノコが入っていました。フワッてキノコのいい匂いがします。
レスターが他の箱も開けていきました。
箱は全部で八個あったんだけど、他の箱にも全部、いっぱいキノコが入っていたよ。
『こんなにキノコがいっぱい。もしかして動けるキノコさんが交ざっていたりして』
そうポッケが言ったのを聞いて、僕もみんなもハッとして、じっとキノコを見ます。
中に埋もれちゃっていたら大変だよ。大丈夫？　いない？
僕達がそんなお話をしているうちに、パパが箱の中を確認します。
それで変な顔をしたんだ。もしかしてキノコさんがいたのかな⁉
「今年は随分と大きさがまちまちだな？　それに量もいつもより少ないか？」
パパが変な顔のままそう言います。
え？　こんなにいっぱいなのに、少ないの？
「今年はどうにも。我々の仲間でいつも通り交換をしたのですが……こちらを見てください」
オルドリーさんが、荷馬車のカバーを外します。そこには箱が四つ置いてあって、そのうちの一つを、僕達の前に運んできました。
みんなで箱の中を覗くと、中にはいっぱいの、ボロボロのキノコと、腐っているキノコ

が入っていました。
「向こうの箱も全部、こういったキノコばかり入っています」
オルドリーさんは申し訳なさそうにパパにそう言います。
残りの三つの箱にも、ダメなキノコばっかり入っているんだね。
それを聞いたパパが、ダメなキノコも一緒に買うぞってオルドリーさんに伝えます。
「せっかくここまで運んできてくれたんだ。それにいつも君は美味しい季節の物を運んできてくれるからな。このダメなキノコだって肥料にはなるだろう。レスター、いつも通りに」
「かしこまりました」
「いいのですか？　ありがとうございます！」
オルドリーさんはレスターと一緒に家の中へ行きます。パパはボロボロのキノコを手に持ちながら、どのくらい肥料ができるかって、一人でブツブツしだしました。
ママは残念そうにしながらも、ベルに言って、綺麗な方のキノコを少しカゴに入れて、先に家の中へ持って行かせてました。
それから少しして、いつもお庭を綺麗にしてくれるおじさん達が、こっちに歩いてきたよ。
キノコの肥料の話を聞いて、ダメなキノコを取りに来たみたいです。

肥料ってどうやって作るのかな？　作るところ、見てみたいなぁ。
パパやおじさん達のお話を聞いていたら、明日から肥料を作り始めるみたいだから、見に行ってみようかな？
僕はドラック達に話しかけます。そうしたらみんなも見てみたいって言ってくれたよ。だから、それをパパに伝えてもらいました。
それでパパがいいって言ったから、明日の予定が決まりました！　グッシーも一緒に来るって。
畑の近くで作るから、ついでに野菜を貰って食べたいみたい。相変わらず食いしん坊だね。
レスターとオルドリーさんが戻ってきました。
これからそれぞれ、ダメなキノコといいキノコを運んで、箱をオルドリーさんに返したらオルドリーさんの仕事は終わりだって。
僕達はオルドリーさんに、ありがとうとバイバイをして先に家の中へ戻ります。
「オルドリーが持ってきてくれるキノコは、いつもとっても美味しいのよ。キノコだったらジョーディも食べられるから、楽しみにしていてね」
「うみゃあ」
「そうよ。うみゃあよ」

ママとそんな話をしながら、僕達は遊ぶためのおもちゃがある部屋に行きました。
少しすると窓から、今日は友達のお家に遊びに行っていたお兄ちゃんが、グリフォンのビッキーに乗って帰ってきたのが見えました。ダッグと一緒です。
ダッグはレスターの従弟で一八歳です。この前僕の家に来て、この頃いつもお兄ちゃんと一緒にいます。
廊下を走る音がして、部屋にお兄ちゃんが入ってきました。
「ジョーディ！　今日はキノコのご飯だって!!　オルドリーさんの持ってくるキノコはとっても美味しいんだよ！」
それだけ言って手を洗いに行っちゃいました。本当に美味しいんだね。楽しみだなぁ。
あっ、そういえば、玄関の所に小さなキノコが生えていたはず。明日、肥料作りの見学が終わったら見に行こう。
「マイケル様、ジョーディ様。夕食の準備ができました」
ベルが僕達を迎えに来て、僕はニッカと手を繋いでご飯を食べる部屋に向かいます。
ドラック達は軽くジャンプしながら歩いて行きます。
廊下にはとってもいい匂いが漂っていました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『それでは行ってきます!!』
『気を付けるんじゃぞ!!』
『危ないと思ったらすぐに帰ってきなさい!!』
僕――クルドは僕達の手伝いをしてくれる小鳥に乗って、一番先頭で空を飛び始めました。
その後ろから、一緒に行く子達が小鳥に乗って次々についてきます。そして街のみんなに手を振りながら結界の外へ出ました。
『クルドお兄ちゃん、どのくらいで着くかなぁ?』
『きっと早く着くよ。みんな気を付けてね。騒いで小鳥さんの邪魔をしちゃダメだよ。それから、外は危ないから、絶対に一人で行動しないこと。約束だよ』
『『『は～い!!』』』
僕達の街からこれから向かう森まで、どのくらいかなぁ? ペガサス様がいる森まで、山を何個も越えて行かないといけないんだ。
森の調査とペガサス様にお願いに行くのは僕と、小さい子キノコが四人。僕が一番お兄ちゃんだから、しっかりみんなのことを守ってあげないと。本当はお父さん達が行けたらよかったんだけど、今は忙しくて駄目なんだ。

今の季節は、森の中に生えているキノコも、キノコの街で育てているキノコも、大きく育って、とっても美味しい季節です。
でも今年は違いました。森のキノコはほとんど腐っちゃって、キノコの街で特別に育てているキノコも、半分くらい腐っちゃってます。
お父さん達は原因を調べようと思ったんだけど、キノコが腐っちゃってからすぐに、また変なことが起きました。
今度は土が綺麗な茶色から、どす黒く変わっちゃったんです。今は森の半分くらいがどす黒い色になってます。
慌ててお父さん達は、無事だったキノコを収穫して、綺麗な土をこれ以上消さないために、土を魔力がいっぱい必要な特別な結界で守って、その中でキノコを育てることにしました。そのせいでお父さん達は今動けないんだ。
だから、キノコが腐った原因を調べるために、僕達だけで森の調査をすることになりました。
子供達だけだと危険だからお父さん達が話し合った結果、遠くの森に住んでいるお爺ちゃんのお友達のペガサス様に、一緒に調査してくださいってお願いすることになったよ。
今僕がしょってるカバンの中には、お爺ちゃんからペガサス様へのお手紙が入っていて、なくさないように、しっかり一番奥にしまってあります。

『僕ねぇ、ペガサス様に会うの、とっても楽しみ!!』
『私も！』
『お爺ちゃんのお家に飾ってある絵でしか見たことないけど、とってもカッコいいもんね』
『私、調査が終わったら、ペガサス様にお願いして、背中に乗せてもらいたいの』
『あっ、僕も!!』
一緒に行く子達が口々にそう言います。
僕も乗せてもらいたいな。みんなでお願いしたら乗せてくれるかも。そんなお話をしていたら、もう僕達の住んでいる森の外に出ました。やっぱり小鳥さんは速いです。
『みんな、いい？　ここからは人が多いから気付かれないようにね』
『うん!!』
森を出る少し前から、人の姿がチラホラ見えていたんだけど、今はかなりの人達がいます。見つかったらどんなことをされるか分からないから気を付けないと。
さぁ、どんどん進もう！　ペガサス様手伝ってくれるかな？　それで森が元に戻ったら、みんなでキノコパーティーがしたいなぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今僕達は、みんなでキノコのご飯を食べています。
ベルに呼ばれてご飯を食べる部屋に来た時、ご飯を食べる部屋の前と廊下は、とってもいい匂いがしていて、みんなで勢いよく部屋の中に入りました。
ドラック達はジャンプして椅子に座って、ポッケはホミュちゃんに運んでもらって、テーブルに着きます。
僕も急いでニッカに抱っこしてもらって席に座ったよ。
「にょおぉぉぉ!!」
テーブルの上には、キノコの料理がいっぱいでした。
キノコをそのまま焼いた物、キノコがいっぱいのスープに、スパゲッティー。野菜と一緒に炒めてあったり、お肉料理の上にキノコがたっぷり載っていたりする物や、グラタンみたいな料理もありました。
僕が席に着くと僕達の前に、僕でも食べられる料理が運ばれてきたよ。
僕の前にはおうどんみたいな物に、キノコが細かく切って載っけてある物が来ました。
それからマッシュルームみたいなキノコが焼いてあるやつがドンッ!!　とお皿の上に載っていたよ。とっても大きくて、僕の手よりも大きいんだ。
今は、そのキノコうどんを食べているところです。
「にょこにょこ」

『『『にょこにょこ』』』
「フッ」
ん？　今誰か笑った？　僕は部屋の中をキョロキョロ見ます。
みんなキノコのご飯を食べて笑顔だけど、声出して笑っている人はいません。
僕はまたうどんを食べ始めます。
「にょこにょこ」
『『『にょこにょこ』』』
「フッ、ハハハハハッ!!」
パパが大きな声を出して笑い始めました。笑っていたのはパパだったみたい。なんで笑っているの？　僕はパパをじっと見ます。
「ジョーディ、それにみんなも、なんでいちいち、にょこにょこ言ってからご飯を食べるんだ？」
ん？　なんのこと？　僕が首をかしげていると、お兄ちゃんが、僕達はご飯食べる前に「にょこにょこ」って言ってからご飯を食べているって教えてくれました。
本当？　いつも通りにご飯食べていると思うんだけど。みんなでお互いを見た後、みんなでまた食べ始めます。
「にょこにょこ」

『『『にょこにょこ』』』

バッ!!　みんなで顔を見合わせます。本当に言っていたよ。あれぇ、なんでだろう？

「ふふ、とても美味しいご飯に、この頃ジョーディやみんなはキノコのお話ばかりしていたから、いっぱいのキノコを見て楽しくて、自然と言葉に出ちゃうのかしら」

ママは笑いながらそう言ってました。

僕達はそれからもどんどんご飯を食べていきます。僕がキノコおうどんを食べ終わる頃には、「にょこにょこ」は言わなくなっていました。

続いてマッシュルームです。僕が食べようとしているのに気付いたニッカが、マッシュルームをナイフでひと口サイズに切ってくれました。それを僕はフォークで刺して、あむっ!!

おおお、美味しい!!　口に入れた瞬間、サイダーみたいにシュワワワってなって、その後三回噛んだだけで、キノコは消えちゃいました。地球ではこんなキノコ食べたことなかったよ！

ドラック達もシュワシュワのキノコを食べてビックリしたみたい。手でお皿を軽くパシパシ叩いたり、地面をパシパシしっぽで叩いたりしています。すぐに食べ終わっておかわりしていました。

僕はそんなにいっぱい食べられないから、目の前のマッシュルームを大切に食べます。

このキノコ、貰ったキノコの中にまだあるかな？　また今度食べたいんだけど。

僕達はどんどんご飯を食べて、残さず全部食べることができました。う～ん、明日も美味しいキノコご飯かな？

次の日、パパとお兄ちゃんと、それから魔獣達みんなで、お庭を綺麗にしてくれるおじさん達が、いつも集まっている小さな小屋の所まで行きました。

昨日約束した、肥料作りの見学をするためです。

小屋は家の裏に二つあるんだ。お庭を綺麗にするための道具がしまってある小屋と、それから種や家で飼っている魔獣達の餌をしまってある小屋ね。

そこに行ったら、餌をしまってある小屋の前に、軍手をしたおじさん達が集まっていました。地面にはシートが敷いてあって、大きなカゴも置いてあります。

『あっ、みんなあそこにいるんだな』

ミルクがそう言って、サウキー達が集まっていて、葉っぱをモグモグしている所を指さしました。

ミルクがグッシーから飛び降りて、一番小さい子サウキーの所に向かいます。

その子は、この前生まれた子サウキーです。

あのね、お家で飼っているサウキーは、ミルク以外女の子ばっかりだったんだけど、そ

の子は久しぶりの男の子です。ミルクがお世話しているんだよ。
サウキーは女の子の方が、男の子よりも二倍くらい大きいんだ。だから一緒に跳ねたり、遊んだりすると、時々蹴飛ばされちゃうみたい。それを避ける方法を教えるって、ミルクが力強く言っていました。
「おはようございます、ラディス様、マイケル様、ジョーディ様」
僕達に気付いたおじさんが挨拶をしてくれました。
「サンクス、おはよう。どうだ？」
おじさんの名前はサンクスさんっていうみたいです。
「今、さらっと見ただけですが、思っていたよりも多くできそうです」
僕達はグッシーから降りて、シートの上に座ります。
グッシーとビッキーは僕達が降りたとたん、若いお兄さんにお野菜をねだりに行っちゃったよ。
「では始めますね。最初に、腐っているキノコとボロボロのキノコを分けます」
サンクスさん達はシートの上に、キノコの入っているカゴをひっくり返していきます。それから腐っているキノコや、ボロボロのキノコを木の箱の中に入れていきました。
少ししてお兄ちゃんが僕もやるって、お手伝いを始めます。
それを見てドラック達が僕達もやるって言って、お兄ちゃんの真似をしてキノコを分け

始めました。
僕もやろう!!　僕は腐っているキノコをポイッてして、大丈夫なやつは僕の横に置きます。
「なんだジョーディ、ダメだぞ邪魔しちゃ」
「パパ、ジョーディはちゃんとキノコを分けてるよ。ほら」
お兄ちゃんが、僕がひょいって向こうに投げた、腐ってるキノコを指さします。
「ん？　……本当だな、ちゃんと分けられてる。ジョーディ、ちゃんと分かるのか？」
「パパ、ジョーディはちゃんと僕達のことを見てるんだよ。一緒に遊んでる時も、僕の真似するんだから。積み木の四角と三角を分けるとか。同じ模様のカードを集めるとか。パパ、この頃僕達と遊んでくれないから知らないんだ」
「そ、そうか。うん、ジョーディ、そのまま続けていいぞ」
パパは何か寂しそうな顔して黙っちゃいました。どうしたの？
でもパパが続けていいって言ったから、僕はそのままキノコの仕分けの手伝いをしたよ。
全部のキノコを分けると、サンクスさん達が、ボロボロのキノコだけをシートの上にまた出して、土や白い粉とか、茶色い粉とか、色々な粉をバシャッと、ボロボロのキノコの上にかけました。
「マイケル様、ジョーディ様、さぁ、どんどん混ぜちゃってください。混ぜ終わったら、

この木の箱に入れて、そのまま保管します。少し待てば肥料の出来上がりですよ」
お兄ちゃんが粉のことを聞いたら、魚の骨を乾燥させたやつと、魔獣さんの骨を乾燥させたやつ、後は肥料に必要な粉の何種類かだって教えてくれました。
どんどん粉とキノコを混ぜて、スコップで箱に入れていきます。
全部入れ終わったらサンクスさん達が箱の蓋を閉めて、これで肥料作りは終了です。
「手伝っていただき、ありがとうございました。肥料が出来たらお知らせしますね」
サンクスさん達はそう言って小屋の中に入って行きます。
僕達はパパに魔法でお水を出してもらって手を洗ってから、ミルク達の方に遊びに行きました。
そしてサウキー達と畑で遊んだ後は、今度は玄関前で遊ぶことにしました。
お野菜をねだるグッシー達を無理やり引っ張って玄関の方へ向かいます。
僕がキノコを見つけたんだってみんなに言ったら、すぐに見に行くことに。
グッシー達の相手をしていたお兄さんがホッとした顔をしていたよ。
玄関に着いてから少し遅れて、サウキー達も僕達の後ろからついてきました。
みんなが揃ったら、玄関の端っこへ行きました。確かこの辺にあったよね？　あっ！
あった!!
傘の上の部分と、下の部分だけ黒くて、他の傘の部分と柄が真っ白な、可愛いキノコが

生えていました。大きさは、僕の手よりも少し大きいくらいです。
パパが僕達の後ろから覗いてきながら、これはダメなキノコだなって言いました。
このキノコは毒キノコじゃないんだけど、触るとちょっと手が痒くなるんだって。
それに毒はないんだけど、とってもとっても不味くて、誰も食べないみたいです。苦いんだって。
真っ白でとっても綺麗なキノコなのにね。でも、このキノコにそっくりな、食べられるキノコもあるみたいです。見分けるのが難しいんだって。
僕は触るのを諦めました。そしたらサウキー達が、いつも遊んでいる所にもキノコが生えているって教えてくれて、そこに移動することに。
向かおうとしたんだけど、グッシーがチラチラ、キノコの方を見て歩くから、なかなか進んでくれません。あんなにいっぱい野菜を食べたのに、まだ食べたいの？
サウキー達の遊び場所に着いたら、僕達はグッシーから降りて、サウキーの後について歩きます。グッシーとビッキーは、その場に座ってまったりしていました。
『おい、さっきはどうしたんだ？　食べるつもりだったのか？』
『いや、そうではない。あのキノコ、匂いがまったくしていなかったよな？』
『……そういえばそうだな。確かに匂いがしなかったような』
『あのキノコ。昔、我が見た物と同じ物かもしれん』

グッシーとビッキーはそんなことを喋っています。

「ちー!!」

僕は面白いキノコを見つけたから、まったりし始めたグッシー達を呼びました。

グッシー達はのそのそ歩いて近づいてきます。

僕はグッシー達が来てから、まん丸で明るい紫色(むらさき)のキノコを軽く押しました。するとキノコの傘のてっぺんから、丸い輪っかの小さな煙(けむり)が出たんだ。

何回押しても煙が出るんだよ。キノコから煙が出るなんて面白いね。確か地球にもそんなキノコがあったような?

このキノコも毒キノコじゃないけど、不味くて食べられないみたい。でも、触っても痒(かゆ)くなったり、具合が悪くなったりしないから、遊ぶのは大丈夫。

ドラック達もヒョイッてキノコを触ります。キノコの前にみんなで並んで順番にポンポンポン。

サウキー達が遊んでいる場所には、他にもたくさんのキノコが生えていました。みんな食べられないキノコだったけど。

ベルが僕達を迎えに来るまで、僕達はずっとキノコで遊んでいました。呼ばれて玄関まで戻ったら、グッシーがまたあの真っ白いキノコをじっと見ています。

……グッシー、そんなにその白いキノコ食べたいの?

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『クルドお兄ちゃん見た⁉』

『うん！　しっかり見たよ！』

『あれ、アンデッドだよね』

『なんの魔獣がアンデッドになっちゃったのかな?』

『それよりも早く行かなきゃ！　僕達だけじゃ、もしアンデッドに襲(おそ)われたら逃げられないよ』

『さぁ、みんな。しっかり前を向いて。ちゃんと僕についてきて。ここまで来れば、ペガサス様の所までもう少しだよ！』

2章　街に現れたアンデッド

キノコさんの肥料やキノコさんで遊んで一週間が経ちました。

でも昨日くらいから、急に僕達が住んでいるフローティーの街がザワザワし始めて、僕達が出ていいのはお庭までで、街の広場やお店には行けなくなっちゃいました。

ちょっと離れた森で、怖い魔獣が現れたんだって。

一か所目はパパのパパ、サイラスじぃじの住んでいる街と、僕の住んでいる街のちょうど真ん中にある森。もう一か所は、まだ僕が行ったことがない、街からは二日くらいにある森らしいです。

鳥の魔獣のスーがじぃじからのお手紙を持ってきてくれて、それと同じ頃に、僕が行ったことのない森の近くにある街からも、お手紙が届きました。どっちも怖い魔獣が現れたって内容だったよ。

パパもママ達も、お手紙を読んだ時、とっても怖い顔をしたんだ。パパはレスターにすぐに騎士を集めさせて、ギルドにも連絡しろって言ってました。それからすぐにパパはじぃじに手紙を書いて、スーはじぃじの所へ帰ることに。

手紙が書き終わるまで少ししか経っていなかったけど、スー、少しはお休みできたかな？　僕はちょっと心配です。

「すー、きちょねぇ!!」

『うん！　気を付けて帰るよ！　また今度ゆっくり遊びに来るからね！』

僕が「気を付けてね」って言うと、スーは元気そうにそう言って飛んでいきました。

現れたのがどんな魔獣かは教えてもらえなかったけど、一緒に話を聞いていたグッシー達がとっても怖い顔をしていたから、本当にとっても怖い魔獣なんだと思います。

パパ達はそれから大忙し。今パパ達は、ちょっと遠くの森まで騎士のアドニスさん達を連れて行っていて、ママは街を囲んでいる壁が壊れていないか、壊れそうになっていないか確認しています。

グッシーやビッキーは、空から街の様子や森や林の様子を見て、ギルドの人達や騎士さん達も、街の周りの森へ調査しているんだ。

僕達はパパ達が森に行ってから、自分達の部屋で寝ないで、一階のお部屋で寝ています。

あと、サウキー達がミルクに、子サウキーを僕達と一緒にいさせてってお願いしてきました。

子サウキーはまだ小さいです。もしお家からも避難することになった時に、逃げ遅れた

ら大変だからね。だから今、子サウキーは僕達といつも一緒にいます。
そんな毎日だったんだけど、でも楽しいこともありました。キノコさん肥料が出来ましたって、サンクスさんが呼びに来てくれたんだ。
今のバタバタが終わったら、この肥料を使って、お花を植えたり、お野菜の種をまいたりするらしいです。その時にまた呼んでもらうお約束をしました。早くバタバタが終わって、パパ達が早く帰ってきてくれるといいなぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私――ラディスは今、私達の街から約二日の距離にある街へと来ていた。
「リック、遅くなってすまない」
「いや、私の方こそ。来てくれてありがとう」
「それで状況は？」
街の名前はチャーネル。そしてこの街を治めているのがリックの一族だ。
三日前、父さんの手紙とほぼ同時に届いたリックからの手紙。まさか内容がほとんど同じだとは思わなかった。どちらの手紙にもアンデッドが出たと書いてあったのだ。
アンデッド。それは魔獣や人間が闇の魔力をまとい、自分の意思を失って動いている存在。

立ち読みサンプル
はここまで

どうしてそのようなことが起こるか、明確な答えは分かっていないが、一つだけ分かっていることがある。それはとてつもなく強い存在だということだ。
前回、ワイバーンのアンデッドが出た時は、一瞬にして一つの森と、二つの街がなくなってしまった。
「今回ワイルドベアーのアンデッドが三体出た」
「三体!?　そんなに出たのか？」
「ただ、サイズはそこまで大きくなく、攻撃もなんとか防げるほどだと」
私達が玄関ホールで軽くそんな話をしていると、階段から足音が聞こえてきた。
「すぐに出発じゃ!!」
そう言いながら階段を下りてくる人物は、リックの父のコットン殿だ。
コットン殿は私の父さんと同世代で、父さんが若い頃は、よくつるんで森に魔獣を狩りに行ったり、お酒を飲んだりした、かなりいい関係だったと聞いている。
「父上、まさか行くつもりですか」
「当たり前だろう。この街の危機に動かないバカがどこにいる。この街は私達の街だ。消されてたまるか」
慌ててリックがコットン殿を止める。私はそんなコットン殿に近づき挨拶をする。
だが、私の挨拶を「おう！」の一言で流して、またすぐに外へと出て行こうとした。